

## ■強情強気マルティナまんこ v s 山賊輪姦種漬け責め

世界を救うため、勇者と共に旅をしている女闘士マルティナ。今は人里離れた山奥を越えているところだ。今日中に越える予定だったが、想像以上に険しい獣道が続き……魔物との連戦による疲労もあって、思うように進行できないでいた。

【ごめんマルティナさん、ボクを庇ったせいで……】

「いいのよ、これぐらい」

マルティナに対し罪悪感を口にする勇者。進行速度が遅い理由には、マルティナが怪我をしたことで機動力を低下させてしまったこともあるのだが……その怪我は、魔物との戦闘中に勇者を庇って出来たものなのだ。

無論、マルティナは気にしてなどいない。勇者の盾になることこそ、マルティナの使命だからだ。が……やはり山道が更に険しくなったのは事実。

しかもこの辺りには凶暴な山賊がいるという噂もあり、早くも山道を越えたいのだが、この分では日が暮れるまでに通りきるのは難しそうだ。

「私たちはいずれ魔王を倒さなきゃならないのよ……こんな山道くらい……！」

プライドと使命感から自らと勇者を鼓舞する。しかし精神力だけでどうにかなるはずもなく、進行速度は変わらないでいた……

「……！」

それからしばらく進んだ時、地を踏む音が聞こえる。二人の歩みによるものではない。また魔物なのか、それとも……不穏な気配が二人に緊張を与え、張り詰めた沈黙が訪れる。

二人は息を呑み、一步前進。すると、また二人以外の音。先程と距離が変わっておらず、明らかに二人を追った動き。また、気配は野生動物や魔物のものではない……それを確認して顔を合わせると、マルティナと勇者は同時に駆け出した。

全力で走る二人。その後を追ってくる複数の存在。その動きは縄張りを荒らされた怒りや警戒などではない、悪意のあるものだ。逃走する二人は無言ながら、追ってくるのが噂の山賊、もしくはそれに類する者であると察していた。となれば、そのまま進行しては包囲や先回りの恐れがある。そのため無言で駆けているのだが……

（こいつら、足音からして身軽でもないでしょうに……速い……！）

追手は足音の大きさから、少なくとも今のマルティナや勇者より重量があるように思える。しかし、それでいて追う速度はマルティナたちとほぼ変わらない……いや、距離は少しずつだが確実に縮まってきている。やはり噂が立つ程度にはこの地よく理解しており、マルティナたちが苦戦した獣道を軽々と乗り越えてくる。

（このままじゃ、いずれ追い付かれてしまう……！ 勇者だけは、私が守らないと！）

万全ならばともかく疲弊した今、地の利がある者の手が届くのも時間の問題。だが完全に包囲される前に今追って来ている敵を一人が相手すれば、もう一人は逃げられるかもしれない。

マルティナは少し思考した後、確実に勇者を生かすために踵を返した。

世界以上に、勇者を救う……それがマルティナに課せられた最大の使命だからだ。

「ここは私に任せて！ 早く！」

性格上、振り返るであろう彼に向けて言い放ち、追手……想像通りの屈強な肉体と人相の悪さを併せ持つ山賊と相對する。複数の男たちは、獲物を確実に仕留めるために発言を控えているようだが……その表情と手に持った武器からは、慈悲の欠片もない殺意と悪意が前面に押し出されている。

会話もなく斧を振り下ろす彼らに、こちらも慈悲は無用——先頭の男に対し、渾身の回し蹴りを放つ。山道の進行速度はともかく格闘能力はマルティナの方が上らしく、男は豪脚によって身を浮かせ、腹を抱えて悶絶する。

次いで勇者に近い順に攻撃。相手の脚を狙い、倒せずとも機動力を封じることで勇者が逃げられる可能性を手堅く確保していく。マルティナも相当な疲弊はあるが、山賊たちはマルティナが女であることに油断と邪念を抱いたため後手に回っている。これならばマルティナも逃れられるかもしれない。

……そんな希望が見えてきた時、後ろで大きな衝突音が聞こえる。咄嗟に振り向くと、マルティナの瞳には更に多くの山賊たちが、勇者を打ち倒す光景が映し出された。

それを見てようやく気付く。後ろから追ってきていたのは陽動であり、既に主力は先に待ち構えていたのだ。

陽動部隊が後ろから襲い、待ち伏せする主力と挟み撃ちにする。これが山賊の手法なのだろう。主力側は、まだマルティナが勇者と共闘すれば何とか突破できたかもしれない。だが焦って戦力を分散させた結果、勇者を一人で敵主力に向かわせることになってしまった。後悔に打ちひしがれる間もなく、山賊の一人が片手で勇者を持ち上げる。

【そこまで女……こいつが殺されたくなかったら大人しくしな】

勇者は既に気を失っており、抵抗は不可能。山賊の太い指は簡単に人一人を掴み上げており、人の首を捻り潰すのもそう困難ではないだろう。

そしてその男をはじめ、山賊たちはマルティナの肉体に下賤な興味を抱いている。殺さずにわざわざ人質を取った理由は、容易に想像できた。

「……お願い、その人には手を出さないで。私にできることなら、何でもするから」

【偉そうな口聞いてんじゃねえよ】

「あっ！」

後ろの男に後頭部を打たれ、続いて他の男たちによって手足を押さえ付けられる。

【ま、殊勝さに免じて殺すのはやめてやるよ。お前が黙って肉便器になればな】

【久々の獲物だ、ぶっ殺したらすぐ愉しみがなくなるもんなあ！】

凶悪な言葉を平然と吐いていく山賊たち。噂以上の醜さに虫唾が走ってくる。だが今の言葉が真実であれば、マルティナが犠牲となることで勇者は助かる可能性が出てくる。真に受けることはできないが……勇者の命が助

かること、それを第一に考えて大人しく男たちに従う。

仰向けに寝かされ、脚を抑えたまま開かれる。無防備となった女体を、剥き出しの性欲で頭からつま先まで眺められる。

【しかし、女なら誰でもよかったが……場違いな別嬪じゃねえか？】

最初に蹴飛ばされた男が、やられたお返しとばかりに視姦。ジロジロと凝視し、マルティナの女体美……日が暮れだし、明るさが遠のいてなお輝いて見える白い肌、同じく艶を発する長い髪、ほどよく付いた筋肉の上にたっぷりとした脂の乗った太股……そして体格自慢の男たちの手にも余る大きさでありながら、重力に逆らって形を保つ胸を愉しまれる。

【しかしバカみてえにデカイ乳だなあ？ こんなスケベな身体は初めて見たぜ。さぞ このガキに ぱふぱふでもしまくったんだろうな！】

「っ！ しないわよ、そんな下品なこと……！」

【どうだかなあ？ まあいい、使い込んでねえなら俺らがみっちり教えてやるからよ……女の身体の使い方をな！】

「！」

言うど、男はマルティナのスパッツを腕力で強引に引き裂いた。このような行為は何度も経験しているのか、器用に股間部だけが露わになり、誰の目にも見せたことのない女の秘部が山賊たちに晒されてしまう。

(まだ……あの子にも、見せてないのに……！)

身を削る旅をしているマルティナにとって、将来を誓った男などいない。ゆえに誰にも見せることを許さなかったが……もしも見せる相手がいるとすれば、今この場にいる勇者その人だったかもしれない。失神しているため彼には見られていないが、人質をとっていると山賊の一人がアピールしてくるためどうしても視界に入り、他の男には見られたくないという屈辱に倒錯的な感情が含まれて顔が一層朱くなる。

【見ての通り、後がつかえてるんでな……早速いくぜ！】

複雑なマルティナの心境に対する配慮など一切なく、男が正面に構える。衣服は既に脱ぎ去っており、卑劣な山賊に相応しい醜悪な肉棒が女を待ち侘びて反り返っていた。

宛がわれ、湿り気などあるはずもない陰唇に押し入ってくる。与えられるであろう痛みを備え、マルティナは息を呑んで歯を食い縛る。

(……来る……っ！)

ずぶ……！

「んん……っ！」

陰唇を押し広げ、深々と挿さる肉棒。性器が貫かれる衝撃は想像以上に強く鮮烈であり、あらゆる修業に耐え抜いたマルティナも激しい痛み思わず呻きを上げてしまう。

【おー、入った入った。へへ、強情張ってても結局声出てんじゃねえかよ。痛えか？ ん？】  
「っ……こんなもの……なんともないわ……！」

肉壺の感触を愉しみながら煽る男に対し、強気に睨み返す。貫かれる痛み、犯される屈辱は筆舌に尽くし難いものであり、さしもの女闘士も精神が削られていく。だが弱味を見せることはそれ以上に耐えられず、より強い気迫で以って視線と言葉だけで反抗する。

【そうかい。ま、お前の都合なんざどうでもいいがなっ！】  
ずぷっ……ぱんっ！ ぱんっ！  
「っ！ く……！ う……………っ！」

そんなマルティナの強気を男が一笑に付すと、腰を高速で動かした。その動きは射精のみを考えたものであり、とにかく早く絶頂できるようにという独り善がりな腰使いだ。

【あー、いいぜこのマンコ！ 久々なのもあって格別だぜ！ 即行で出ちまいそうだっ！】  
ぱんっぱんっぱんっぱんっ！  
「あっ！ う……く、ふ……っ！」  
(こいつっ……本当に、何の遠慮もない……っ！)

男は気遣いなど一切しない。あれほど視姦した胸にさえ触れるといった愛撫もなく、ただひたすらに犯すのみ。まさに欲望のままと言うべきピストン。それが、彼らが完全に女を性欲処理のための道具として扱っているのだということを教えてくれる。  
身体を触れられるのは当然嫌悪するが……ただただ雄棒を満足させるために使われることもまた、マルティナのプライドを酷く傷付けていく。

【出るぞ、出る……！】  
ぱんっぱんっぱんっぱんっ！  
「っ！ う！ ……………っ！」  
(出される……！ こんなヤツらの精液が、中に……！)

境遇に憂う暇もない。男は早々に限界が近付き、今にも射精に至りそうだ。何の遠慮もない山賊に避妊の心配などあるはずもなく……むしろ極上の牝に種漬けするという雄としての支配欲のまま、マルティナの中で欲熱を爆ぜさせた。

【おらっ！ 孕めっ！】  
ドプッ!!! ビュルルルルルッ!!!  
「っっ……………っ！」  
(出された……！ 本当に……っ！)

男が根本まで押し込み、本能のままに膣内射精。覚悟をしていたとはいえ、名前も知らぬ外道に子種を注がれ

たという事実が、マルティナの精神力を大きく揺さぶる。

対し、山賊たちは見下ろしたまま好き勝手な言葉を並べる。

【あー……いい具合だったぜ女！ 絶対俺の子種で孕ませてやるからな……！】

【いいから早くどけよ、後がつかえてるっつの】

【しかし厭らしい身体の割に全然感じやがらねえな……あれ使うか】

一人が何やら呟き、ある物を取り出す。液体の入った小瓶と、じゃらじゃらと音を立てる小袋だ。この状況で使われるものといえば色々と察せるが、思考する前に男がマルティナの頬を掴み、強引に唇を開かせる。

「んぐうっ！」

【吐いたりしやがったら即あのガキ殺すからな……おらっ全部飲み干せっ！】

小瓶の中の怪しげな液体、袋の中に入っていた錠剤らしきものが喉の奥に押し込まれていく。逆らえるはずもなく、液体を飲み、錠剤も一つ一つ嚥下。意外にも甘い芳醇な香りに嗅覚だけ救われるも、やはり得体の知れないものを飲まされて苦渋の相となる。

（媚薬……麻薬？ 碌でもないものなのは確かでしょうけど……）

【よし、飲んだな。じゃあ次は俺だ！】

ずぶんっ！

「っ……！」

疑問を抱く間にも、二人目が挿入。女を抱けるのがよほど嬉しいのか、ギラついた眼で結合部を見ながら息を荒げて腰を振る。だがその興奮はマルティナには全く理解できず、ただただ苦痛に耐えるのみだ。

【どうだ、俺のは？ あのガキよりよっぽどいいだろっ！】

「まさか……上手くやってる、つもり……？ 生憎ね……痛いだけよ、色んな意味で……っ！」

【言ってくれるなあオイ！】

反抗の言葉を放つと、犯す男も含めた山賊の多くが嗤いだす。マルティナが犯されながらも気丈な反応を示していることに愉しんでいるようだ。

（心底、ケダモノね……こいつら……！）

どんな形であろうと、反応をすれば愉しむ男たち。その異常さに腹の底から不快感が込み上げてくる。だがその時、身体の中の違和感がただ不快なものだけではないことに気付く。

「っぐ？」

（なに？ 喉が……お腹が、妙に熱いような……）

【お、効いてきたか？】

その時の微細な反応にはあざとく気付き、犯す男がしたり顔で語る。



【さっき飲ませたろ？ あれはよく効く媚薬だからな……そろそろマンコが熱くなってきたんじゃないか？】

飲まされたものは、やはり予想通りの代物であった。どんな手を使ってでも快楽を与え、それにより墮とすことで女を自分のものにしようと目論んでいるということか。醜さに怒りも湧くが……それよりも、普段からそんなことを考えて媚薬を持ち歩いていること、息巻いていながら完全に道具頼みという情けなさに、むしろ笑いすら込み上げてくる。

「ああ……やっぱり、そういう類のもの、なのね……っ！ 女に縁のないヤツらが、使いそうな手だわ……っ！」  
【いいねえ！ その態度がどこまで持つかなあ？！】

そろそろ射精が近いのか、男の呼吸が乱れていく。全く快感を与えられていないというのに、勝ち誇った顔で腰を強かに打ち付け、雄棒を脈打たせた。

【そらっ、出すぞ……っ！】  
ビュルッ!!! ドクドクドクドクっ!!!  
「うっ……………！」

放精そのものや膣内射精の支配感で男の顔がにやけている。だが、やはりマルティナは摩擦による強い痛みしかない。媚薬の効果もただの熱感のみ。これで果たして快感など得られるのか。

【次は俺だ】  
ずっぶ……！  
「……………っ！」

山賊たちの豪語と乖離した現実。反撃の機会を待つマルティナは痛みを忘れるため、三人目が挿入する間も客観的にこの状況を分析しているのだった。

——……  
——.…………

【おー、出る出る……締め付けてるぜえ……っ！】  
ビュクッ!!! ドプププッ!!!  
「はっ……はあ……っ」

男が肉壺の具合に満足しながら膣内射精を終える。  
……これで五人目だ。媚薬を使い、墮とすつもりでありながら、山賊たちはただ挿入し、膣内射精していくのみ。  
それぞれ腰使いや性器、精力に違いがあるのかもしれないが、マルティナからすれば同じ作業が続くのみだ。

「ふう……っ！ んっ……」

ただ、下腹部の熱は少し存在感を主張してきた。それが単に媚毒が回ったからか、男に犯された影響かは分からないが、確実に肉体を蝕みつつあるようだ。

しかし……確かに熱は感じるものの、まだまだ快感には程遠い。それを知ってか知らでか、男がいちいち確かめてくる。

【少しは効いてんじゃねえか？ どうせ女は男には勝てねえんだ、素直にヒイヒイ善がっちまえよ】

「なら、そうさせてみなさいよ……頼まないで勝てないって悟ってるのかしら？」

【よし、次いけ次い！】

ぢゅぶうっ！

「ん……っ！」

(本当に……ただ、出すしか能がない連中……っ！)

挿入した途端に少しだが、確実に増した熱感。いつかこれが快感に変わるとしたら……そんな不安を払うよう、身体を揺さぶられながら自分に言い聞かせる。

(数と薬で、女を手に入れようとするヤツらに……負けるわけないわ……！)

ドクッ!!! ビュブルルルッ!!!

「う……………っ！」

——……

————……

ぱんっぱんっぱんっぱんっ！

「っっ！ ……………っ！」

……十人目。他の男からの陵辱によりマルティナの秘部は白い穢れが目立ってきているが、男たちは何も構うことなく牝壺蹂躪を愉しんでいる。

最初に誰かが肉便器、などと言っていたが……まさに精液を排泄するためだけの便器といって差し支えない扱い方だ。

挿入し、欲望に任せて腰を動かしては限界に達し、白濁を注ぐ。客観的に見れば、ただその作業が続いているだけだが……

マルティナの中では、静かに異変が起こっていた。

「……っ！ ……………っ！」

胎の熱が、男に犯され続けるのにつれて広がっていくのを確かに感じる。心地よいとは思わないが、その熱感の苦しみによる声が出そうになる。

例え快楽を得ずとも、薬の影響が出たと悟られたくはない。そのために声を殺しているマルティナだが……

【呻き声が減ってきたじゃねえか……声抑えてんのか？】

「……っ！」

やはりこういう部分だけは妙に鋭く見ている。応えるのが嫌で沈黙するが、肯定しようと否定しようと男たちは都合よく受け取って高笑いし、それがマルティナには不愉快で仕方がない。

【健気だねえ……あの男には善がり声を聞かせたくないってか？】  
(！ こいつ……好き勝手言って……！)

自分が嬲られるのはともかく、勇者を絡めての侮蔑嘲笑は許せるものではない。マルティナは言い返さない代わりに、睨み殺す勢いで視線を飛ばす。

(いつまでも、こんなヤツらの好きにはさせない……！ 必ず隙を見て、いつか……)  
ずばあんっ！

「んあっ？！ っ——！」

【はは、いい声で啼いてきてんじゃねえか！】

その時、男が肉壺の前面を抉るように肉突き。すると下腹部が僅かに跳ね、裏返った声が出てしまった。  
慣れない箇所への、一際強い刺激。それで身体が動かされた拍子の結果なのだろうが、男は得意になって数回に一度、同じ動きで抉ってくる。

「……！ うっ……！」  
(身体、揺すられて……また、変な声が、出そうに……！)  
【この辺が弱えのか？ 感じてんだったら素直に言えよお？！】  
「っっ！」  
(感じてない……！ こんなヤツらに犯されて、そんなこと……！)  
【おらっ中出しっ！】  
ずぐんっ！ ドクッ!!! ビュルウウッ!!!  
「……………っ！」  
(そんな、こと……………！)

——……

————…

ドブ!!! ゴビュルルッ!!!  
「んはっ……あ……っ！」

更に男がマルティナを犯し続けた。これで十五人目であり、最後の一人でもある。  
ただしこれで終わりなどということはなく、山賊たちは自身にも媚薬……精力剤を使い、精力を増すことで二周目からも、と張り切っている。まだまだ続けるつもりなのだ。  
既に白濁で見えなくなった孔に、最初の男がまたマルティナの締めりを味わおうと挿入する。



【久しぶりだなあ……このチンポの形覚えてるかあ？ 嫌でも覚えさせてやるからな……っ！】

ずぶりゅっ！

「っは！ あ……！」

技術は分からないが、精力だけは立派な男の勃起。それに再び貫かれ、マルティナは押し隠せない声を出す。山賊が総出で犯し続けたことで、女闘士の肉体には明らかな変化が表れた。胎の熱がまた大きくなり、身体のあちこちに伝播。次第に身体の内に入り込んでいき……認めたくはないが、極僅かに、確かな性感を感じていた。

【声出るようになったじゃねえか！ もっと喘げやっ！】

ぱんっぱんっぱんっぱんっ！

「ふっ！ あっ！ あ！ くふう……っ！」

(なんで……？ 声が、出てしまう……！ こんなことされて、気持ち良くなんて、ないのに……！)

頭では否定しても、肉体は確実に反応している。

どうやら山賊たちは順番待ちをしている間、マルティナの様子をじっくりと観察していたらしい。そのため、犯す時は欲望任せに動きながらもマルティナの中の敏感な部分を探し当てることに成功したようだ。

十人目の男以降は熱の高まりが増しており、それが彼らの目論みが成果を上げていることを証明しているように思えてくる。

とはいえ、やはり媚薬の効果が大きいのだろうが……なんにせよ、マルティナにとっては望まぬ事態となっていた。

「はぁっ！ あ！ んっ……っふうっ！」

(気持ち良くない……！ 薬なんて、効いていない……！)

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ！

「んっ！ あ！ 激しっ……あ♥」

【いいねえ！ それだよ、今の声だよ！】

激しいピストンで肉傘が陰核の裏側……山賊たちに弱点扱いされている部分を引っ搔かれ、一瞬とはいえ、遂に牝の声が出る。

マルティナは小さく髪を左右に揺すりながら、朱くなった美貌で否定を繰り返す。

「調子に、乗らないで……！ 私は……！ こんな手に、絶対に堕ちたりはしない……っ！」

【今の言葉覚えとけよ？ 絶対に堕としてやるからなぁっ！】

ドクッ!!! ビュルルルルルルルッ!!!

「ふっ……♥ う……♥」

摩擦による痛みしか感じなかった膣肉が、次第に精熱を感じだしている。生暖かいものをかけられ、ぬるま湯に浸かった時の様な心地よさを感じながらも、マルティナは懸命に耐え続ける……

——……

\_\_\_\_\_.....

ばんばんばんばんっ！ ドピュルルルッ!!!

「うあ……っ♥♥」

(こいつら……いつまで……!)

輪姦も三周目の後半に突入。四十以上も犯され続け、いよいよ声の甘えた響きが隠せなくなっていた。

まだ精神は毅然としているものの、肉体はその気丈さについてこれない。いつ終わるとも知れぬ輪姦に体力が削がれ、そのせいか媚毒が回って発情効果が更に増幅されている。

【顔も蕩けてきたなあ？ あんだけ強気に睨んでたクセによお！】

ずんっ！

「かふっ♥ あ……っ♥」

(太いのが……また……っ!)

性感が高まり、膣肉が敏感になるにつれて肉棒の感触もより明瞭に感じ取れるようになっていた。それにより山賊たちの肉棒の大きさが、少なくともマルティナには太く長く感じられるサイズであることを思い知らされる。

しかもその感覚まで少しずつ増大している。肉壺の締まりも良くなってきており、そのため膣道が狭まって、より肉根を過敏に感じてしまうのだ。

男の言う通り高貴さを残していた強気な顔も次第に崩れ、怒りではなく苦悶……快樂の苦痛に染まってきている。

明らかに危うい状況。それでも、むしろ弱味を突かれたことで、男たちの気が緩んで隙が生まれないかと願っていたが……

ごづんっ！

「あっ♥♥ ひい……っ♥♥」

【お？】

男が最奥……快樂と媚毒により降りてきた子宮を突いた。その時、いつにも増して肌が震えた。ただの痛みによるものではない、快樂による強い反応。目の当たりにした男が、これを待っていたとばかりに責めを強める。

【おい女、これってよお……】

ばんばんばんばんっ！

「ふっ♥ あ♥ あああっ♥♥」

【お前、そろそろイクんじゃねえか？】

「っ?!」

(イク……? それって……っ!)

その言葉を聞いてハッとする。イク……つまり性快樂の絶頂に至るということ。男によれば、それが今にも迫ってきているのだという。

信じたくないが……もしそうなれば、もう快樂を感じていることを言い訳できない。何より、自分自身を誤魔

化せなくなってしまう。

不安からつい逃れようと手足に力を入れるが、当然抑えられているために動くことなどできるはずもない。

【図星か？ 逃げようとしてんじゃねえよっ！】

ずばおっ！

「ちがっ……くふああっ♥♥」

【イカされるのがそんなに悔しいか？ あ？ だったら我慢してみろよ、絶対に堕ちないんだろお？！】

ずばんっ！ ぱあんっ！

「堕ち……ないっ♥♥ こんな……ことでえっ♥♥」

(耐えないと……でも……弱いところっ♥ 突かれたら♥ ダメ♥ 何か……来る……っ♥)

精神力ではもうどうにもならない。子宮と前面を刺激されるたび、甘い電流が全身へ駆けて制御できない快楽を生む。

胎の底から何かが迫るような感覚に襲われ、それと呼応するように男が射精に向けて動きを加速させる。牝肉の昂ぶりもここぞとばかりに本能的快感を求め……子宮突きと膣内射精により、マルティナの理性を押し退けて一気に破裂した。

【おらっ！ イケっ！ イッちまえっ！】

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ！

「んひあっ♥♥ あ♥♥ ひっ♥♥ つひいっ♥♥」

(我慢♥♥ 我慢しないとっ♥♥ なにかっ♥♥ 来て……もう……っ♥♥)

ごづうんっっ！

「ああああっ♥♥」

(ダメ………もう………っっ♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！